

みやすく論旨も明晰であり、しかも本全体の構成として、解説や要約、背景となる経済理論の解説まで付加するという親切な工夫がなされている。したがって、もし新入生が本書を一読す

れば、経済問題に興味をおぼえ進んで経済学を学ぶ意欲がわくのではないかと思い、紹介することにした。

早川いくを

『へんないきもの』(バジリコ株式会社、2004年8月発行、1500円+税)

●———井上 治子

厳密に言えば必ずしも新刊とはいえないのかもしれない。初版が2004年8月に出て10月には第4刷が出ている。また、専門書ではなく、むしろ娯楽書に部類するかもしれないが、あえて紹介させていただきたい。それというのも、この書を手にして、数カ月ぶりで大笑いし、家族に読み聞かせてしまったほど、私はこの書にはまっているからである。

といってもこの書は、貝類、魚類、ほ乳類、鳥類、は虫類、軟体動物、微生物にいたるまで、この世に生をうけている「いきもの」を、ほとんど無差別的に採り上げ、著者独自のコメントと、どちらかといえば稚拙にも見えるイラストによって、その生態を個別的に簡単に紹介しているにすぎない。例えば、「キンチャクガニ」(無表情で無脊椎なチアリーダー)のコメントは次のようなものである。

ゴドラ星人似のこのカニは両手に「ボンボン」をもっている。ボンボンを左右に振る姿はチアリーダーのようだが、別に何かを応援しているわけではない。これは実はイソギンチャクで、彼らはこのイソギンチャクにエサをとらせたり、敵を追い払ったりして、いいように利用して生きているのだ。カニは移動性というイソギンチャクのメリットを盾に、これは共利共生である、と主張するかもしれないが、かなり一方的である。しかもそれなくしてはもはや生きていけないのだ。女に寄生するヒモのようなものである。金づるを失っては大変なので、絶対放

さないよう、ハサミもイソギンチャク挟みに特化した進化を遂げている。

キンチャクガニ同士が顔つき合わせて、ボンボンをリズムに合わせて左右に振っていることがある。先輩のチアリーダーが後輩に「クリステイ、そうじゃないわ、こうよ!」と指導しているのでは無論ない。これは縄張り意識の強いこのカニが、相手を領土から追い出そうと、イソギンチャクの武器で威嚇しあっているのだ。

だが、お互いに手の内がばれている武器で威嚇しあっても何の意味があるのか。このカニは「道具を使う唯一の無脊椎動物」などとおだてられていい気になっているが、一向にそこに気付かぬあたりが甲殻類の限界というものであろう(14~15ページ)。

この解説が引き出す笑いが、著者の斜めから世界を覗きみているような語り口の痛快さと、写真ではなくイラストであるが故にかき立てられる想像力の働きの由来するということは改めて言うまでもあるまい。しかし、果たしてそれだけだろうか?

個々の生き物のどこがそんなに「へん」なのか?なにがそんなにおかしいのか?

生きとし生けるものにとってもっとも肝心なことは食べることで敵から身を守ること、そして子孫を残すことであろう。それこそ気の遠くなるような長い何月をかけてそれぞれのいきものは現在のような体系と生態を獲得したことであろう。その過程においては、おそらく涙ぐま

しい自然淘汰の歴史と、種と個体維持のための血なまぐさい闘争を繰り広げていたはずである。われわれ人間の生活にとってほとんどなんの意味ももたない取るに足らないこれらのちっぽけな生き物が、われわれの関知しない世界でこのような長い歴史を延々と淘汰を続けながら生き続け、それぞれ独自の知恵と工夫を現在われわれが目にするような独自の仕方で開花させているというこの絶対的な事実の重みこそが、このおかしさの原点であるとはいえないだろうか？そして、さまざまな驚くべき工夫を凝ら

して必死に種と個体を維持しようとしている個々のいきもののその健気さと、自然が示すその偉大なる多様さと許容力を目にして思わず頭が下がる思いがするのである。この書がこれほどおかしいのも、それぞれのいきもののその奇怪な形態や生態において、われわれ人間の愚かさやごう慢さを映し出すパロディを見てしまうからではないだろうか？

それにしても、「ヒト」は「へんないきもの」ではないのだろうか？

ベルナルド・リエター著

『未来のマネー』(小林一紀・福元初男訳『マネー崩壊』)(日本経済評論社、2000年9月発行、2300円)

— 新しいコミュニティ通貨の誕生 —

●————元田 厚生

1 ファスト風土化する日本

編集子からは近刊の紹介を依頼されたが、三浦展『ファスト風土化する日本』(洋泉社新書Y、2004年発行、760円)を読んで、ベルナルド・リエター(Bernard A. Lietaer)『未来のマネー』(Das Geld der Zukunft, 1999.邦訳『マネー崩壊』日本経済評論社、2000年発行、2300円)を紹介することにした。そのコミュニティを紡ぎ出すという視点の新しさからである。

三浦は特に「地方の郊外」における少年犯罪の増加に着目して、これまで家族論や青少年論から問題解明に努めてきた。しかし前出の新著では、家族や青少年の変容以前に地域社会が変容し、それが「犯罪を生み出す土壌」に変わったという観点を押し出している。

犯罪性の立証に問題を残す「長崎の少年犯罪」さえ、風土の変容から一律にアプローチする手法はいささか牽強附会の感もしないではない。しかし現在の地方に共通して見られる、地域固有の歴史や伝統や価値観に根ざすコミュニティの崩壊、それと表裏一体の関係にある、地域社会における共通理解の消滅(「土地の匿名化」)

という見方には賛成できる。三浦は生活環境の全国一律化に「ファスト風土化」という卓抜な名称を与えている。

私が注目したのは、近代社会の成立以降続いてきた、中世に起源を有するコミュニティの解体がいまや犯罪の温床に擬せられる段階にまで至ったという感慨である。いいかえれば古いコミュニティに変わる新しいコミュニティの未成立、個人の自立を阻むコミュニティではなく個人と相互浸透できるようなコミュニティが未だ成立していないことの苦悶の声をそこに聞く思いがしたからである。

2 個別と共同の相互浸透

近代社会が発展するにつれて顕在化してきた貧困や犯罪などの社会問題に対して、これまで多くの対案が提示されてきた。その多くは近代における弱肉強食的競争に代表される「個人」主義に問題の根源を見だし、近代の超克を新たなコミュニティの創出に求めるものであり、それゆえ彼らの思想は「社会」主義と総称されたのである。

しかし近代社会の生成は二重である。それは